→そろって咲いた校舎南のヒマワリ

向日葵（ひまわり）の茎（くき）真っすぐに背比べ

この夏は、蛇口から出る水がお湯かと驚くことが度々あった。まさに烈暑。屋外の活動は早朝や日が陰ってから行うなど、各々工夫してやり過ごしたことだろう。こんな厳しい環境下で、校舎南のヒマワリは草丈二メートル近くに成長した。一粒の種から盛りを迎えた花々の生命力に感服する。

夏休みの中盤はパリオリンピックの情報に世間が沸いた。多くのメダル獲得者、出場者のエピソードが紹介される中、私が印象に残ったのは、フェンシング男子フルーレ団体で優勝した永野雄大選手である。永野選手はリザーブ選手、いわゆる補欠であることから、他の三人の選手と待遇に差があった。そのうえ決勝戦まで一度も出場がかなわずベンチで過ごした。なんと初出場が、金メダルを賭けた決勝戦（全九試合四十五点先取）、一進一退の末に三十五対三十四の一点差で迎えた八試合目だったのである。そして、尋常ではない緊張感の中、五連続でポイントを取得し（五対〇）、対戦相手のイタリアを圧倒した。その後、九試合目の飯村選手で優勝が決定する。

【竹水鉄砲遊び】

金メダル獲得後の選手紹介で、永野選手が「練習の鬼」と呼ばれる努力家と知る。一世一代の場面で「やるしかない」と覚悟を決め、チャンスをものにした背景には、練習で築き上げた技能とメンタルの強さがあったのだ。また、帰国後には、「卓球とフェンシングが好きで漫画を読む普通の中学生でした。いちばんうまくなりたいと思って練習を続けただけなので、熱中するほど好きなことを見つけて続けることが大事だと思います」と、小中学生からの質問に謙虚に答えられている。

明日からパラリンピックが始まる。事故や故障、または生まれながらにハンディがあっても、あきらめず磨き抜いた技能や体力に目を奪われる。岡崎市からは陸上女子千五百Mに山本萌恵子選手が出場する。山本選手は、リオデジャネイロ、東京オリンピックで女子千五百M七位を獲得し、今回のパリで三大会連続出場となる。山本選手は小学生時代、宿題をどんなに時間がかかろうと最後まで丁寧にやり抜く子であった。中学校で陸上に目覚めてからは、部活動はもちろん、早朝や休日も自主練習を休まず続けたと聞く。そんな個性が花開き、現在は第一線で活躍するまでに成長されたことを心から嬉しく思う。そして、その半生を思うにつけ、人の可能性の大きさを実感する。

さて、満開を迎えたヒマワリは、種のもつ力だけで成長したのではない。水やりを絶やさなかったこと、根が地中深く張ったことも、酷暑を乗り越えられた要因であろう。

【一学期末　朝に自主清掃する四年生】